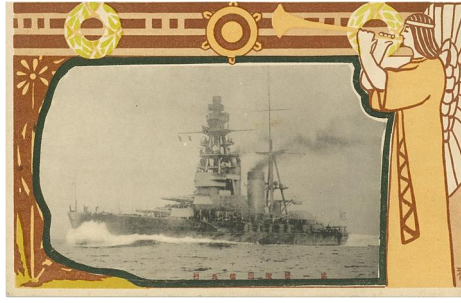


緒明山 OAKIYAMA-TSUSHIN 通信18



絵葉書「第一艦隊旗艦長門」

発行日
令和8年(2026年)3月20日

発行者
横須賀市立中央図書館郷土資料室
住所 神奈川県横須賀市上町 1-61
電話 046-822-2077

本誌は印刷発行していません。
右の二次元コードが下のURL
で横須賀市立図書館ホーム
ページ内「デジタルアーカイブ」
にアクセスして閲覧してください。
ダウンロードもできます。



<https://www.yokosuka-lib.jp/contents/archive/>

◆私の戦争体験◆

女学生が経験した勤労働員と横須賀空襲

～元磐城高等女学校生徒 高橋富美さんに聞く～

収録日 令和7年(2025年)8月8日

場所 高橋富美邸

聞き手 谷合 伸介

(横須賀市立中央図書館郷土資料室)

はじめに

令和7年(2025)は、昭和100年及び戦後80年にあたる節目の年であったことから、全国各地で昭和の時代を振り返る様々な取り組みが行われた。そうしたなか、中央図書館でもレファレンスをきっかけにご縁がつながり、横須賀において最大の空襲被害が生じた昭和20年(1945)7月18日の空襲経験者の方から貴重なお話を伺う機会を得た。

横須賀における空襲は、主に軍事施設を攻撃対象としたもので、結果として他地域にみられるような数千人以上もの犠牲者を生んだ市街地への無差別

爆撃ではなかったことから、横須賀には空襲はなかったと思われている方も少なくない¹。しかし、実際には当時横須賀には何度も米軍機による攻撃が行われており²、全く空襲と無関係な地域ではなかった³。

今回、インタビューの機会を得た高橋富美さん(旧姓 山本)は、福島県立磐城高等女学校3年生だった昭和19年(1944)11月8日、横須賀海軍工廠^{かいぐんこうしょう}に学徒勤労働員され、昭和20年8月18日、故郷の福島に戻るまでの間、横須賀で暮らした⁴。当時、横須賀には東北地方等から多くの女学生が勤労働員され、海軍工廠や海軍航空技術廠などでの仕事に従事していたが⁵、高橋さんもその一人である。当時、まだ14歳だった高橋さんが、親元を離れ、横須賀の海軍工廠で勤務した日々や生活上の苦労などをお話しいただいた。なかでも、海軍工廠勤務時に遭遇した昭和20年7月18日の横須賀空襲の経験談は、大変貴重なものである。同日の横須賀空襲において、米軍機の主たる攻撃目標は、真珠湾攻撃の旗艦で、当時、横須賀軍港に繋留されていた戦艦

¹ 昭和20年7月18日の空襲では、少なくとも横須賀市内で20人以上が死亡しており、軍港内では戦艦「長門」の乗組員からも多数戦死している(『新横須賀市史 別編 軍事』2012年、672頁～674頁)。「長門」の被害については、註17を参照されたい。

² 横須賀では、昭和17年4月18日、昭和20年2月15日、同月16日、同年7月10日、18日に攻撃を受けた(註1と同書)。詳細は、高村聡史「米英海軍による空襲と横須賀」(『市史研究 横須賀』第13号、2014年)を参照されたい。

³ 主に軍事施設を対象としたものだったことから、被害の実態を示す資料や体験者の証言が少なく、今日においても、その被害の全貌は明らかでない面がある。

⁴ 磐城高等女学校生徒の勤労働員については、小豆畑裕繁「戦時下における磐城高等女学校―「教務日誌」を中心として―」(『福島史学研究 第47・48合併号』、福島史学会、1986年)、『桜丘の百年：福島県立磐城桜が丘高等学校創立百周年記念誌』(福島県立磐城桜が丘高等学校創立百周年記念事業実行委員会、2005年)等に詳述される。

⁵ 註1と同書、685頁～690頁。

「長門」だった⁶。高橋さんは、この時、「長門」近くの作業小屋に勤務しており、その日も、いつもと同様にこの場所に出勤し、空襲に遭遇することとなる。当時、女学生が目撃し、体験した横須賀空襲の一部始終について、お話を伺わせていただいた⁷。なお、この体験談は、当館郷土資料室職員が高橋さんのご自宅に伺い、インタビューした内容を編集の上、まとめたものである。



インタビューにお答え頂く高橋富美さん

1 横須賀海軍工廠での勤労働員

—— 高橋さんは、磐城高等女学校在学時に、福島県から横須賀海軍工廠に勤労働員で来られたと伺いました。その当時のことについて、教えてくださいませんか。

高橋 当時、女学校から二百数十人が横須賀に勤労働員で行きました⁸。在学時6組あり、私がいた1組は海軍工廠内の電気班に配属され、同工廠の日の出寮⁹で暮らすことになりました。日の出寮は何棟もあって、新潟の方から来た挺身隊のお姉さんたちがいたことを覚えています。あと、浪江の女学生¹⁰も日の出寮にいたみたいね。日の出寮には、たくさん棟がありました。当時は、自分のことに夢中で、他の事には目が向かなくて全く分からなかったけれど、他にもいたようだよ。あと、同じ学校であっても、職場はそれぞれ離れていて、他に長浜寮というところに行っていた人もいました。私の一期上の学年は、横須賀ではなく、郡山に動員で行っていたけれど、そこに行っていた人は、皆亡くなってしまいました。郡山に富久山工場¹¹という所があって、そこが空襲に遭ってしまって、大変な犠牲者が出たのね。私たちの学年は、皆無事に終戦後3日で福島のご自宅に帰ることができました。

—— 勤労働員で横須賀に来られた時は、まだ 14

才だったと伺いました。ご両親は、大変心配されていたのではないですか。

高橋 学校の先生がいる寮では、親子2人で一晩だけ泊まることできるという規則がありました。だから、母が2人で一緒に寝たくて、わざわざ福島から横須賀まで来るわけよ。ところが、母が来る途中、隣町の勿来^{なごそ}の付近で空襲があって、汽車から降ろされてしまったんです。その後、何とかまた汽車に乗ることができて、やっとの思いで横須賀に着いて、一晩一緒に寝たの。喜ぶ子どもの顔を見たくて、母は来たのよね。親が横須賀まで来たのは、私の母だけでした。

—— 海軍工廠では、一日どれくらいの勤務時間でしたか。

高橋 朝は早かったです。6時ぐらいにはちゃんと起きて、共同の洗面所で歯を磨いたり、いろいろな身支度をして、9時前には海軍工廠に入っていたかな。帰りは、5時過ぎくらい。お昼休みなど、休憩時間もありました。自由時間は30分くらいあったかな。仕事をやりながらお喋りして、「今日何食べる」とか、そんな雑談をしながら、やっていました。

⁶ レイテ沖海戦で損傷した「長門」は、昭和19年11月25日、横須賀港に入港。以後、外洋に出ることはなく、特殊警備艦に艦種変更された。迷彩塗装が施され、マストや煙突も大部分は撤去され、事実上の「浮き砲台」となった。

⁷ 高橋さんの横須賀空襲体験談は、2025年7月12日付読売新聞夕刊の記事と合わせて参照されたい。

⁸ 昭和19年11月8日、動員学徒282名が、午前7時37分発の列

車で横須賀に向け出発した。

⁹ 当時、日の出町には、海軍工廠工員宿舎があった（現在の神奈川県横須賀合同庁舎付近）。

¹⁰ 浪江高等学校3、4年生は、横須賀海軍工廠に勤労働員されていた。

¹¹ 昭和20年4月12日、軍の指定工場であった日東紡績富久山工場が爆撃され、死者121名、重傷者27名の被害を生んだ。

—— お給料は頂けていましたか。

高橋 はい。細かい金額は忘れてしまいましたが、頂いていました。

—— 海軍工廠ではどのような仕事に従事していましたか。

高橋 海軍工廠の中は大きくて、何班何班と分かれていたのね。私は電気班というところにおいて、最初の頃は、電線の錆をとる仕事をしていたの。海軍の兵隊さんが、修理したい電線を肩に背負って持って来るんです。その運ばれてきた丸い電線を3センチぐらいに切って、それを抜くわけ。そうすると中からたくさん細かい錆びた銅線

が出てくるから、それを広げるのよ。今考えると、マスクもせず作業して、よく病気にもならなかったと思う。それを広げて、鉄のワイヤーブラシで磨いて錆をとるのね。そうしたら、それをきれいに集めてまとめて縛るわけ。それを挟むものがあるって、穴の開いた筒状になっているから、そこにはんだ付けをする。はんだも自分で作ったよ、鍋で温めてね。

—— すでに使用した電線をもう一度再利用するために、3センチくらい切って中を外し、錆をとって磨いて、またつけ直すという作業をされていたということですかね。

高橋 そうです。最初は、電線の修理をする仕事だったの。でも、ある時、その中から、私を含めた十何人かが選ばれて、「長門」のすぐ側の作業場に移ることになったんです。

—— 電線のお仕事をされていた時は、まだ「長門」の側の作業場ではなく、別の場所で作業していたということですね。

高橋 そう。海軍工廠本部ね。門から中に入ると大きな海軍工廠の本部があって、そこで働いていました。思い出すのは、味方が右手の山上から、大砲を撃っていたけど、上空を飛んでいたB29には全然弾が届かなかった光景を覚えています。

—— 実際にご覧になったのですね。

絵葉書「横須賀海軍工廠前」



(横須賀市立中央図書館郷土資料室蔵)

高橋 はい。パンパン撃ってはいるけど、ただ鳴っているだけだった。門を入れて、しばらく行くと本部があって、そこに行っていたのだけれど、ちょうど、その脇に山があった。ある時、寸胴の太い敵のグラマン¹²という飛行機が職場のすぐ側まで飛んできました。職場の窓の外をワーって通り過ぎていったの。本当に星のマークが大きく見えた。初めて見ましたよ。

—— それは横須賀空襲があった7月18日よりも前のことですか。

高橋 そう、それより前。電線の錆び取りの仕事をしていた時。その後、「長門」の側にあったドックの上付近の作業場で仕事していたわけね。

—— その頃は、米軍機の機銃掃射もあったのでしょうか。

高橋 私自身は見えていないのですが、亡くなった私の主人から、機銃掃射だったのではないかという話を聞いたことがあります。主人は、当時、早稲田大学の学生だったのですが、横浜ゴムに勤労働員されていたそうです。ある時、横浜ゴムで作った製品を横須賀海軍工廠にトラックで運びに行くことがありました。ちょうど、同郷の福島から磐女(磐城高等女学校の略称)の生徒が横須賀に来ているという話を聞いていたから、自分もトラックに同乗して横須

¹² 当時、米海軍の軍用機を製造した企業にグラマン社があり、同社のF6F ヘルキャットは、当時の主力艦上戦闘機として知られる。

賀に来たのだそうです。それで、トラックで工場の中に入っていったら、前方の道路上にいた人が、突然目の前でバタッと倒れてしまったのだそうです。その方は亡くなってしまっていたと話していました¹³。

——他に印象に残っていることはありますか。

高橋 当時、水兵さんたちは、外出するときに外に物を持ち出したいと思っいろいろと持ってくるわけ。ところが、どうしても門の所に衛兵がいるものだから、チェックがあつて、物を外に持ち出せないのよ。私達は、無条件で門をくぐって外に行けるから、水兵さんが近くに寄ってきて、「これを持って行って」って頼まれるわけ。何を頼まれたかという、チョコレートのお菓子とか縫い物の糸とか針などを持っていくように言われるの。それで、実際に工場の中から門を通過して外に出るでしょ。そうすると、その兵隊さんも外に出て、後ろから追い駆けてきて、誰もいなくなったところでそれを受け取るの。お礼にチョコレートを1つ貰ったりしたこともあったようだね。

——そうだったのですね。ただ、高橋さんたちはその門を通る時は、チェックはされなかったのですか。

高橋 大丈夫。私達は学徒だから。学徒の場合は、調べられることはなかった。無条件に通れたの。

——なるほど。兵隊さんもそれを知っているから、頼むわけですか。

高橋 そう。兵隊さんはチェックがあつて、自由に物を持って出られないから、門を出る少し前のところでみんな物を預かるわけよ。実際のところ、私自身は、直接兵隊さんから頼まれた経験はないけど、自分の友達はみんなそういったことを頼まれていました。あと、それとは別に覚えているのは、憲兵隊の人たちがいて、その方たちに捕えられた人が、蓑笠みたいなものを被らされて、青い着物を着せられていました。何人が繋がれて憲兵さんに引っ張られていく光景は見たことがありました。

——「長門」の近くで作業されていたということですが、もう少し詳しく場所を教えてくださいませんか。

高橋 当時、軍港内に「長門」が繋留されていました。「長門」の前には、岸壁があつた（「長門」の左舷側と推測される）。その脇には歩ける道路があつて、その向こう側にドックがあつたわけ。その深いドックの上に、鉄板が敷かれている所があつて、その上に小屋が建っていたのね。そこで仕事をしていました¹⁴。海軍工場の本部から出張という形で、毎日そこに通っていたのね。最初の頃は、電動車みたいなものに乗せてもらって喜んで行っていたけど、そのうち、みんな歩いて行くようになりました。

「長門」の上からは、みんな手旗を振ってくれていました。でも、こっちはよくわからないから、手を振って「どうも」ってやっていた。本当は、手旗には信号を送る意味があつたのよ。手旗のことがわかっていれば、それがどういう意味だったのか、わかるのしょうけど、当時の私達はまだ子どもだったから、意味なんてわかりませんよ。よくわからなかったから、「おはよう」の意味なのかなと思っ、とにかく、私達も手を振って「おはよう」とやっていました。あれは懐かしいわね。

——日常の光景だったわけですね。海軍工場で従事されたお仕事をいろいろとお伺いしましたが、その勤務環境は過酷に感じられていましたか。

高橋 最初は、きついか辛いとかよりも、率直にこれはいったい何なのだろうと思っました。特に、やってみて汚いとかは思わなかったですよ。ただ、今思うとマスクをしないでしょ。作業で出る埃や塵やら、全部吸い込んでいたと思うと、本当によくこの年齢まで生きていられたなと思うの。自慢するわけじゃないけど、私は、電線の作業は上手だったと思う。今も、「やって」と言われたら、結構できるのじゃないかな。仕事自体がきついかということよりも、慣れたということだったのかもしれないね。喧嘩もしなかった。皆、仲が良くて。本当に今考えれ

¹³ インタビュー後、高橋氏からお手紙をいただき、息子様が亡くなったお父様から子どもの頃に聞いた話をお伝えいただいた。それによると、トラックの前方で倒れた人を見て、近くに駆け寄っていった時に、その人の背中に小さい穴があつたのが見えたが、兵士がそ

の人の身体を上に向けた際、おなかにとっても大きな穴があつたのを見たとお話しされていたという。

¹⁴ 当時、何の作業なのかは分からなかったが、大きな四角の箱の側面に数字などを彫って、ペンキ（緑色）を塗る仕事だったという。

ば、親、兄弟よりも仲がよかった。助け合いだったのだろうね。

—— 皆さんの上司にあたる方は、どのような方々でしたか。

高橋 私たちが、海軍工廠に行って、一番お世話になったのは、組長さん。組長さんは、海軍の人ということではなくて、徴用で働きに来られていた方ね。今でいえば、組長さんが部長とか課長なのかな。その下に現場のまとめ役みたいな方がいて、その人が伍長だった。

—— その関係性の中で、印象に残っていることは何かありますか。

高橋 私達は田舎から来ているでしょ。髪の毛を縛ったら、おさげも10センチまでって決められていて、それ以上は長くできなかった。着る物も、モンペでしょ。でも、一緒に来ていた地元の湘南高等女学校のお嬢さんたちは、みんなスラックスみたいなものを着て、下がちょっとゴムになって縮んだかわい服を着て来るわけよ。お弁当を持って、綺麗な恰好をしてね。そう思っているところに私たちを指導した伍長は、いわきの田舎の学校だと思って、馬鹿にしてくるわけ。自分だって、山形弁で、何かわからないことを言うのにね。組長が偉くて、その下に伍長がいました。伍長は、山形から徴兵で来たおじさんで、その人が馬鹿にしてきてね。みんな悔しい思いをしました。田舎者だから、言葉は悪かったかもしれないけれど、磐女の生徒たちは、校是の「正しく、清く、朗らかに」でプライドをもって育ってきたから、みんな悔しがってね。ただ、ある時、工廠の中で、演芸会みたいなものを行ったことがあった。自分の得意なものをみんな学校毎にやるわけね。その時に自作自演でどこもやらないような出し物を各クラスのみんなで行ったわけ。お友達が私に「あんた覚えてないだろうけど、駅前の旅館に行って、提灯借りてきたんだよね」というのよ。そのことはよく覚えていないけれど、確かに提灯を持ってやる劇や踊りだったのね。英語なんてできないけど、誰かが作ったのよ

ね。その曲は今でもまだ覚えています。薫みたいなのを身に着けて。今でいえばハワイアンセンターでやっているような感じで。どんな意味だったかも、今となってはわからないけど、誰かがそれを作って、みんなで踊ったのね。そこで私たちの本性を思う存分発揮したんです。そうしたら、組長も伍長もびっくりしてしまって、「何なんだ、この学校は」と。それから、磐城高等女学校は一躍有名になって、普通の目で見られるようになった。馬鹿にされることはなくなって、私達もプライドを取り戻すことができたんです。

2 横須賀空襲（昭和20年7月18日）のこと

—— 「長門」の側の作業場でお仕事されていた時に、横須賀空襲に遭ったとお伺いしています。空襲に遭遇した時のことを教えていただけますか。

高橋 先ほどもお話ししたけれど、私達は、下がドックでその上に建てられた作業小屋で仕事をしていました。7月18日の空襲は、ちょうどお昼時で、ご飯を食べ終わった後のことでした。その時も、空襲警報は出ていました。それで、上の伍長さんや偉い方が、「長門」の近くのドックの上辺りにいたの。その人たちが、準備して待っていたわけね。それで、いよいよ空襲になって、これはもう危ないという時に、職場の誰かから「そこを開けて、下に逃げろ」

空襲を受け、炎上する横須賀海軍工廠。手前は海軍航海学校。



(バージニア州ノーフォーク市立マッカーサー記念館蔵)

と言われました。作業小屋の横にあった四角い床がハッチのようになっていて、それを開けると下がドックになっていた。1か所、天井裏のようになっているところがあって、それが開けられるようになっていたのね。それまで見たことはなかったけど、とにかくみんなをそこに逃がそうとしたんです。「降りろ、降りろ」と指示されて、そこに逃げた。ただ、後にも先にも、あんな谷底みたいなドックに逃げ込むことになったのは、私ら13歳、14歳の学生だけだったと思います。ハッチの下は、ぶらんぶらんした梯子があるだけ。その梯子を使って、ドックの下の欄干まで「降りろ」って言われたけど、こんな場所を見たこともないし、訓練だってしたことにはなかった。実際、「降りろ」と言われても、どうやって、こんなにぶらんぶらんした梯子を降りるのだと。きっちり掴まないと落下してしまうわけだから、もう奈落の底ですよ。下の欄干まで降りるのに必死で、2段目の欄干のところまで何とか降りたとき、梯子が突然ブランコのように「ウーン」となって。それが何回かあって、「もう駄目だ」となって、みんな「神様！」とか「お母さん！」と何回も叫びました。何とか耐えて、みんなで肩を寄せあってね。ドックの下に逃げ込んでいる時は、爆弾が、いつどのように落ちたのかは、無我夢中でよくわからなかった。直接、衝撃や振動は感じなかったけれど、2段目の欄干に辿り着き、梯子がブランコのように大揺れして、自分ももう駄目かなと思った時がそれだったのではないかと思います。落とす人は「長門」を狙ったのでしょうか、あと0.0何秒か爆弾を落とすタイミングがずれていたら、私たちの真上に落ちたと思うんです。しばらくしたら、今度は「上がってこい」と言われて。でも、普通の梯子ではないから、「これをまた上がるの」と思いましたけど、何とか捕まって上がっていきました。

白矢印の場所に繋留されていた「長門」が見える(写真中央)。米軍機は、「長門」を攻撃目標とした。海に見える波紋は爆撃によるもの。「長門」の位置から少し上方に6号ドックが見える(赤矢印)。高橋さんが通った作業小屋は、別途ご本人から頂いたスケッチ等からも、6号ドックの上であった可能性が高い。



(米国国立公文書館蔵)
(写真中の赤矢印は、郷土資料室が説明のため加筆)

そうして、ハッチの上の地上に出ると、そこにあつたはずの小屋は全部吹っ飛んで無くなっていました。「やられた」という声が聞こえました。
—— その後は、どこに避難されましたか。
高橋 今度は「山に逃げろ」と言われて。でも、どこに行けばよいかわからなくて、とにかく、まずは近くの壊れた窓から外に飛び降りました。そこは、ペンキを使う場所だったから、缶がドロドロになっていて、飛び降りた私も他のみんなも水色や草色とかペンキまみれになってしまつて。そうしていたら、海軍菊水隊¹⁵の回天¹⁶のお兄さん(20歳くらい)が、ちょうど私の前に来て、おんぶしてくれて、山の方

¹⁵ 菊水隊は、楠公父子の七生報国の精神に因んで名づけられた決死隊。最初の体当たり攻撃を行った4隊のうちの1つ。

¹⁶ 太平洋戦争末期に海軍が投入した特攻兵器。潜水艦で攻撃目標の近くまで輸送され、その後、目標に発進し突撃する兵器。

に連れていってくれたんです。それで逃げることができたの。みんなも私の後を泣きながらついてきてね。私は、本当にそのお兄さんに助けられたんです。ようやく辿り着いた所は、本来は毛布などをいっぱい入れておく倉庫みたいな場所だった。そこに私たちを避難させてくれようとしたのね。職員の方が、その扉の鍵を取りに行き、鍵を外そうとしてくれていたのだけど、ちょうどその時に、敵の機銃掃射に遭ってしまって。その方は、撃たれて、殺されてしまったんです。徴用で来られていた方だった。お弔いは、その後、海軍工廠の本部で行いました。本部で祭壇のようなものを飾ってお葬式をやりましたけど、本当に辛かったね。子どもにこんな経験をね。もうしたくないね、本当に。今の若い子は、みんな幸せよ。

—— 悲惨な現場があったのですね。言葉を失います。山の避難先には、しばらくの間おられたのでしょうか。

高橋 山の避難先では、怪我をしている人がいたから、救急袋を持ってきて、傷の手当も行いました。

昭和20年8月29日、米軍によって撮影された「長門」。沈没は免れたが、爆撃により甚大な損害を受けた。



ただ、その後、解除というか、家に帰っていいといわれて、夕方、避難先を出ました。遠回りしながら、何とか岸壁の方に出て、本部に行きました。1トン爆弾がどこに落ちたのかは、逃げるのに無我夢中でよくわからなかったけれど、夕方、岸壁に戻って来たら、周りは水が溢れるわ、ドロドロの状態になっているわで、朝見ていた多くの船がこの時には一隻もなく、「長門」も半分海に傾いていました。「長門」の兵隊さん、何十人も亡くなったのね¹⁷。「長門」の上にあった何だかわからない丸い輪っかみたいなものを1個ずつ下ろしていたのを見ました。後で、「長門」の側にあった自分の作業場を片付けに行った時に、「長門」からトラックに積荷を積んで海の方に運んでいくのを見たことがあるの。水葬にするという話で。

—— ご遺体を運んでいたということですか。

高橋 そう。ただ、その後、女学校の同窓会の時に、別のクラスの人が、自分の職場の近くにご遺体を焼くところがあったと話す人がいて。それなら、「水葬にしたわけではなかったんだね」と話をしていたことがあったんです。クラス毎にそれぞれ職場が違

っていたから、そういう話も聞くことができたのでしょ。けれど、最初にトラックで運ばれていく光景を見た時は、辛く嫌な思いでしたよ。

—— その後は、日の出寮に戻られたのでしょうか。

高橋 なんとか本部まで辿り着いたら、先生が待っていて、「今晚は横須賀の街中が空襲でやられるから」と言って、日の出寮とは反対側の山上の防空壕に走って逃げたんです。日の出寮には、いつ

(米国国立公文書館蔵)

¹⁷ 「長門」では、艦長・副艦長以下40人にのぼる多数の戦死者を出したとされるが、それ以外の基地内の詳しい戦死者数は明らかになっていない(註1と同書、674頁)。なお、7月18日の横須賀空

襲による軍港内の施設被害については、『横須賀海軍工廠外史(改訂版)』(横須賀海軍工廠会、1991年)339頁～341頁に詳述される。

たん戻ったけれど、中には入らず、皆おにぎりを1
ずつ渡されてそれを持って駆け足で工廠とは反対
側の山の方に上がっていきました。避難した山の上
の防空壕は、本当に立派で下には木板の簀の子がず
っと先まで敷いてあり、驚きました。

—— 山上の立派な防空壕の付近に砲台などはあ
りませんでしたか。

高橋 それはどうだったかな。はっきり覚えていな
いです。とにかく、いつもは日の出町から海軍工廠
に通勤していたけど、それとは反対の町側の山上に
上がっていきました。

—— 山上からは、どのような光景が見えたのでし
ょうか。

高橋 横須賀の湾が見えて、その向こうには横浜が
見えました。翌朝、そこから横浜・川崎方面を見る
と、朝なのに夕焼け小焼けのようなオレンジ色にな
っていました。先生が「あれは横浜方面が燃えてい
るんだよ」と教えてくれました。結局、その時、横
須賀は全然無事で1発も落ちることはなかったん
です。その時、特に覚えているのは、何か音楽みた
いなものが聞こえてきたんですね。みんな子供心に
「何だろう」と話していたの。当時は、朝鮮の人が

たくさん来ていたのね。その人
たちが、石やら棒みたいなもの
を持ってきて、カンカン叩くん
だけど、そのリズムが上手なの
。それがとても心地よかった
のを覚えています。防空壕の入
り口のところでやっていたね。

—— 辛いご記憶をお話しい
ただき、ありがとうございます
。もし何か横須賀空襲に関す
る資料をお持ちでしたら、ご紹介
いただけませんか。

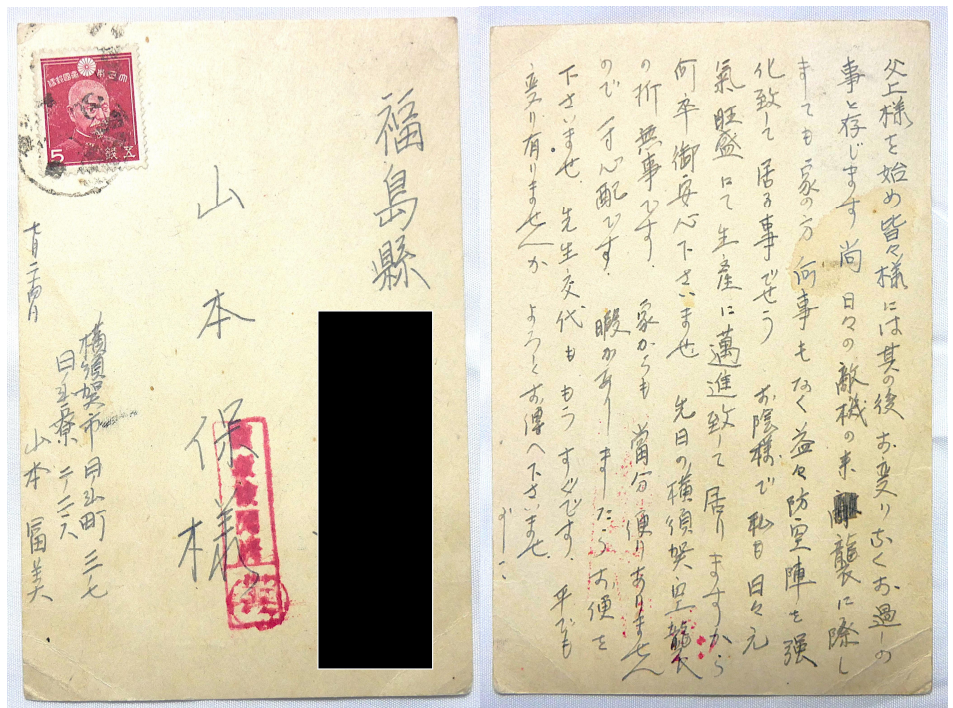
高橋 これは、私が日の出寮から
いわきの両親宛てに出した手紙
です。父の遺品整理で実家に行
ったら、父が兄の満州か

らの手紙と私の手紙を一緒を取っ
ておいてくれたみたいで、残っ
ていたのよ。

—— 昭和20年7月24日のお手紙
で、7月18日の横須賀空襲直後
のもので、貴重な資料ですね。
検閲済印もあります。

高橋 この手紙には、こちらは
大丈夫ですから、安心してくだ
さいということを書いているの
。でも、大丈夫だと言ったって
、これ検閲されるから、横須
賀の空襲のことなんて詳しく書
けないわけよ。だから、「御安
心下さいませ」とだけ書いて
いるの。平（現 福島県いわき
市内）に姉がいたから、そ
ちらの家族のことを心配して
大丈夫ですかということも書
きました。でも、本当はここ
に書きたかったわけよ、横須
賀の空襲のことも。でも詳しく
書けないからね。手紙には、
自分の家からも、便りがな
いので心配ですということも
書いていたけど、この頃は、
いわきの辺りも海からの艦砲
射撃が、どんどん飛んで来て
、山に逃げるのも容易じゃな
かったことを帰ってから聞い
たの。風船爆弾¹⁸が、勿来から
上がりましたから、狙われて
いたのじゃないかな。だから
、あちらは手紙を出すどころ
の状況ではなかった。でも
、私は私で、本当のことは書
けない。空襲があつ

高橋さん（旧姓 山本）が横須賀の日の出寮から実家の父に宛てて送った手紙。



¹⁸ 風船に水素等のガスをため、その下に爆弾を吊るし、気流に乗せてアメリカ本土を爆撃することを目的とした。風船爆弾の基地の1

つが福島県勿来にあった。

て、書きたいことがあっても、書けないわけよ。だから、「無事です」とだけ書いたのね。

—— ありがとうございます。他に何かご紹介いただける資料はありますか。

高橋 あと、万年筆ね。これは、父が磐女の入学祝いに買ってくれたものなの。今も手紙を書くときに使っています。勤労働員の時も、横須賀空襲の時も持っていたものです。今は、割れてしまって、カートリッジを入れられないから、テープを貼って、また剥がしてという感じで使っているんです。もう80年以上経つものですけど、とても書きやすくて。このペンと一緒に横須賀に行ってきましたから、このペンも”戦争経験者”ですね。これを買ってくれた父のことは今でも思い出します。うちは、母よりも父が女学校の入学式や卒業式の時には来てくれていました。今でも父のことは尊敬しています。こういう万年筆を持っている人が、日の出寮の同部屋の友人にはいなかったから、みんなこれをうらやましがって。欲しがって、「いいね、いいね」と言われた日のことを思い出しますね。

横須賀には空襲はなかったという都市伝説みたいな話があるようだけど、そんなことはないことをわかってもらえたらと思います。

横須賀での勤労働員時に持参し、今も愛用する万年筆



3 横須賀での暮らし

—— 高橋さんが勤労働員で横須賀に来られたのは昭和19年(1944)11月で、いわきのご自宅にお戻りになられたのは、終戦3日後の昭和20年(1945)8月18日のことでしたね。この間の横須賀での暮らしについて、お伺いできますか。

¹⁹ 「比島決戦の歌」をさす。昭和19年(1944)にフィリピン防衛線の戦意高揚のため作られた戦時歌謡。

²⁰ 戦前は戦意高揚の歌を作ったが、戦後は日本の復興を後押しする曲を数多く手がけた。代表曲に「栄冠は君に輝く」等がある。NHK

高橋 まだ横須賀に来て間もない頃は、出かけることがありました。空襲警報はあったけれども、まだ敵機が直接飛来していないような時ね。その時に先生が江の島や鎌倉まで連れていってくれました。これは、鎌倉や江の島行ったときの桜貝だよ。皆さん少しずつ分けたら、だんだん減ってきたけど。当時出かけた時の思い出のものです。これだけしか売ってなかったの。桜貝の歌とかを歌っていたから、懐かしくて、大事にとっていたんだよ。それ以後は、先生も、もう引率なんかできるような状況ではありませんでしたね。

思い出の桜貝



—— お休みの日は、どのように過ごされておりましたか。

高橋 日曜日が、お休みの日でした。ただ、休みとはいっても、半日ぐらしか遊べなかったのよ。午前中は、日の出寮の畳の掃除があったから。虫対策だったのよね。日曜日の午前中になると、部屋の6畳の畳を各部屋毎に2階に運んで、みんなで畳干しをやったんです。その時に歌う歌がありました。当時は、アメリカは憎らしい存在だったわけね。それで、畳干しの時に「いざ来いニミツツ、マッカーサー、出てくりゃ地獄へ逆落とし」¹⁹という歌詞の歌があって、それを歌うんですね。福島市出身の作曲家、古関裕而²⁰という人が作曲した曲なの。作詞は西條八十²¹でね。その歌を歌って、畳を2階に上げたんだよ。それでも、やはりお休みの日は楽しみで、さいか屋に行ってみようかとか話していました。—— 実際、さいか屋には行かれましたか。

連続テレビ小説「エール」は古関氏夫妻がモデルとなったことで知られる。

²¹ 詩人であり作詞家。代表曲に「青い山脈」などがある。

高橋 はい。ただ、行ったけれども、売っているものが何にもないの。あったのは、慰問袋²²と小さい瓶の香料。味つけに少し垂らして使うものがあるでしょ。それくらいしか売っていなかった。当時は、みんな子どもだったから、「何するものなんだろう」と思って、好奇心で買って見た。それで、みんなで舐めみたのね。レモン味みたいなものだったのだけれど、本来薄めて使うものだから、濃い原液なんですよ。だから、みんな舐めて、びっくりして「ギャーっ」と声を上げて盛り上がったというのがありましたね。

—— 当時のさいか屋で販売していたのは、そうしたものだんですね。

高橋 そう。まったく品物がないの。何も売っていないから、買えるものもないわけよね。それ以外に出かけたのは、記念艦三笠とか。あと、横須賀の写真館に写真をみんなで撮りに行ったの。海軍工廠から1~2丁²³先のところにあると言われて、そこに行きました。女学生だった自分たちは当時1丁という単位がどれくらいの距離かというのもよく分かっていなかった。何とかやっとの思いで探して撮りに行ったの。それがこの写真。もんぺだよ。農家のおばあちゃんみたいでしょ。

—— 写真の裏面に「学徒動員 横須賀ニテ撮影中B29 空中を通る」と書いてあります。当時の緊迫した状況が伝わってきますね。

高橋 そうだね。寮の同部屋の5人で外出して撮りに行きましたよ。

—— 要塞地帯に含まれた横須賀では、許可なく街中で写真撮影やスケッチなどをすると罰せられたわけですが²⁴、勤労働員で横須賀に来られた時に、先生方から、そうしたことへの注意はありましたか。

高橋 先生や上司から、直接それについての注意はなかったです。というか、そんなことをやっている暇も、ほとんどなかったのよ。余裕がなかったせいもあるけど、そういったことをしようという考えも思いつかなかっ

た。とにかく、食べることで寝ることで精一杯だったからね。

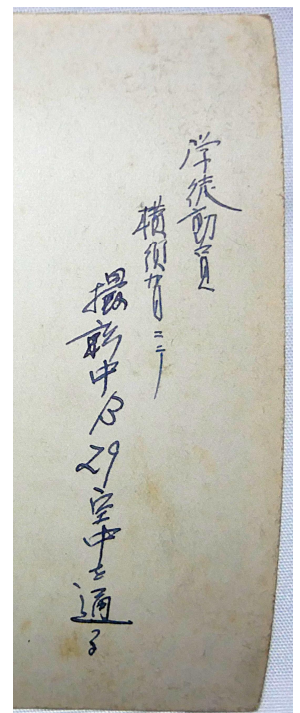
—— 当時の横須賀では、警戒警報や空襲警報が毎日のように出ていたようですが、実際にはいかがでしたか。

高橋 もう本当に毎日ね。だから、服を着たまま寝ないといつ空襲が来るかわからないから、いつもそうしていました。

—— 毎日職場の作業服のまま寝ていたということですか。

高橋 そうです。とにかくすぐに通勤できるように枕元にかばんなどを置いて、そのまま寝ますから。ぱっと起きて逃げられるようにね。そういうことから、シラミが下着にも体にいっぱいついてしまうわけ。そのまま寝ているからね。どうしようかと思っただけれど、みんな感染してしまっていて、どの部屋にもいた。それで、日の出寮にあった大きな釜で、袋に入れて、下着なんかを茹でるわけ。それを干してまた着るんだけど、もうとにかく着物から何からシラミだらけで。食器は、兵隊さんと同じで表が水

横須賀の写真館で撮影した高橋さん。写真の裏面には、撮影中B29が上空に飛来したことが書かれており、緊迫感が伝わる。



²² 出征する軍人などへの慰問の為に手紙や日用品等を入れる袋。

²³ 1丁は、約109メートルを指す。

²⁴ 明治32年(1899)に制定された要塞地帯法は、要塞地帯区域内

において、様々な禁止・制限行為を課し、違反者には罰則も科した。撮影や模写等は、禁止行為の一つだった。

色で中が白い**珧瑯**^{ほうろう}のものを使っていたけど、それも毎食後に、各部屋で大きな網に入れて、釜に入れて消毒しました。そうした食器とは別に着る物なども茹でていたわけね。

もうとにかくそんな毎日でした。終戦の時に天皇陛下が玉音放送でお言葉を出されたけれど、当時は子どもだったから何だかよくわからないわけ。組長さんが「戦争に負けたんだよ」と教えてくれたけど、特に何の感情も湧いてこなかった。ただただ、みんなと「今日から寝られるね」、「安心して寝られるね」と話していました。もう、本当にそれしかないのよ。それが一番。14歳の子どもの素直な感想。今考えると、その感情しか湧かないというのは、非国民だったかもしれないね。それは、反省点ではあるけど、その時は本当に悲しいとかはなかったのよ。終戦になって負けて悔しいとかじゃないの。もう、「今晚から寝られるんだね」って。自分たちだって、お国のために働いたけど、それがどうだったということでもないのよ。子どもで幼かったのだと思いますけど、それくらい苦しかったのだと思います。

—— 他に日の出寮での暮らしで印象深かったことがあれば、教えて頂けますか。

高橋 当時、日の出寮の脇には、丸いドーナツ状のものが積んであったんです。何だろうと思ったら、それは豆粕だった。豆を絞って油を作った粕。豆粕の輪っかの固いものが、リングのようになったものだったの。それを食堂の方が割って、ご飯に混ぜるわけ。そんな固い豆粕を割ったものを入れるご飯だから、やっぱり固いんですよ。その豆粕が山のよう積んであって、それを食堂のおばさんたちが割って炊くわけね。

ある時に、赤いご飯で赤飯みたいものが出たから、今日は何かのお祝いなのかなと思ったの。そうしたら、コーリャン飯²⁵だった。コーリャンという植物があって、その実から作られたものがコーリャン飯といわれていた。それは赤くなるんですね。赤飯だと思って一瞬みんな喜ぶんだけど、実際にはコーリャン飯で。とにかく食べるものがなかったんですね。

かばんの中には、母が送ってくれた大豆を炒ったものをお茶の缶に入れて持って出かけていた。いつも缶には少し豆が入っているような状態にしていたから、みんなにもおすそ分けしていました。いつもカリカリの豆を食べていたから、体が丈夫だったのかなと思ったりもするけれど、とにかく当時は、豆くらいしか食べるものがなかったのよ。家が農家の人は結構食べ物を送ってもらったりして、みんなに分けてくれたりもしましたね。

それでも、日の出寮は、他の寮よりも比較的待遇が良かったみたいです。海軍から月に1回は大福餅が届きました。5人分（部屋の人数分）届くのですが、餅だから周りがどうしてもくっついてしまいます。部屋長さんは、誰にどう配るか困ってしまうわけ。それを剥がそうとすると、どっちかが大きくなったり、小さくなったり、またあんこが片側に偏ってしまったりもするからね。それで阿弥陀くじを作って、決めました。どうしても、小さかったり、あんこが少なかったりということはあるけれど、自分で引いたものだから仕方がない。そんなことをやっていたよ。ただ、それは日の出寮だけだったみたい。他の寮等では無かったようだよ。

—— 当時は、やはりご馳走といえるものは、少なかったのでしょうか。

高橋 そうだね。ただ、学校の先生に内緒で、おいしいものをご馳走になったことがあったのよ。ある時、海軍の立派な白服の偉い将校さんについていったことがあった。私たち十数人だけ、サイダーを飲んだり、おしるこやお餅を食べたりしたんです。もう本当に海軍の中には、これだけの食べ物があるところがあるのかと思いました。兵隊さんが、食缶やら瓶などを持ってやってくるのよ。サイダーは、一升瓶に入っていた。たぶん作っていたんだね。サーベルを下げたちょっと偉い人に「あんた食べる？ 食べなさい、食べなさい」と言われてね。それでサイダーを飲ませてもらったり、おしるこを食べさせてもらいました。その後、巻紙みたいなものに「ここに名前と学校名と自分の住所を書きなさい」と言わ

²⁵ 戦時中や戦後の食糧難の時代に食された白米の代用食。実際には、不味いと感じた人も多かった。

れ、必要事項を書いてきました。知らない人にはついていってはいけなし、飲んでも食べてもいけないというのに、その時はよく行ったよね。たぶん、食べたい一心だったからだと思うのね。何をされるかわからないのよね。

—— これで最後の質問になります。勤務中、食事はどのようにされていましたか。

高橋 お昼ご飯は、海軍工廠の本部でとっていました。2階に行って、何番と言って交替で盛り付けるんですね。いまだに、クラス会があるたびにコソコソ話をするのだけど、ずっと並んでいて自分の席のところだけ、ご飯を山盛りになっている人がいたんです。周りみんな笑っているのだけど、自分は喜んでそれを食べているわけ。みんなはコソコソと「あの人当番だったから」なんて話していた。その人は当番だったから、自分のところだけ山盛りになっていたわけね。でも、要するに、それだけ食べたかったわけよ。だって、今の中学1年生、2年生くらいの頃だもの。

〈参考資料〉

左) 海軍食器 飯茶碗 (比予宇地下壕)

右) 海軍食器 琺瑯皿 (海軍工廠造機部工場地下室)



(横須賀市教育委員会蔵)

—— 貴重なお話の数々、ありがとうございました。これでインタビューを終わらせていただきますが、最後に何かメッセージを頂けますか。

高橋 14歳頃の事ですから、今考えると、本当に子どもだったと思います。ただ、本当に当時自分が見て経験したことをお話ししましたから、何かにお役立て頂ければ、嬉しく思います。

—— 長時間にわたり、貴重なお話をお聞かせ下さり、ありがとうございました。

(文責 谷合伸介)

あとがき

今号では、福島県立磐城高等女学校生徒で横須賀海軍工廠に学徒勤労働員されていた高橋富美氏にお聞きしたインタビュー内容を掲載しました。高橋氏は、「長門」の側のドック上にあった作業小屋で勤務時、横須賀空襲に遭遇しました。同空襲は、「長門」を攻撃目標として行われた米軍機による空襲であり、高橋氏は、まさに敵から標的とされた場所で空襲を経験されました。この空襲被害の全貌は、現在も明らかではありません。高橋氏の体験談は、今後、横須賀空襲を振り返る上でも、地域の歴史を語り継いでいく上でも、貴重な資料となることでしょう。終戦を知り、何よりもまず「これで今日から安心して寝られる」と思った14歳少女の素直な感想は大変印象的で、当たり前の日常を送ることができない現代の私達に改めて平和の尊さを伝えてくれているように感じられました。

最後に、長時間のインタビューを快くお引き受けくださいました高橋富美様に心より御礼を申し上げます。辛い戦争中の記憶を語って頂いたにも関わらず、時折、楽しいお話も交えながら、終始和やかな雰囲気の中でお話をお聞かせくださいました。また、様々な資料をご提供いただくなど、ご協力を頂きましたご家族の皆様にも、この場をお借りし、深く御礼申し上げます。併せて、貴重なインタビューの機会を繋いで頂きました読売新聞社森太編集委員に、厚く御礼申し上げます。

本誌は印刷発行せず、ホームページからダウンロードしていただくことにより無償で頒布しています。印刷及び閲覧は図書館HP内の「デジタルアーカイブ」、あるいは横須賀市のHP内の「市史のトップ」にアクセスしてください。

デジタルアーカイブ⇒

<https://www.yokosuka-lib.jp/contents/archive/>

市史のトップ⇒

<https://www.city.yokosuka.kanagawa.jp/8150/shish/shishi1-top.html>

図書館HP「デジタルアーカイブ」のご案内
横須賀市立図書館ホームページでは「デジタルアーカイブ」のページを開設しています。近世以降の絵図、戦前期の絵葉書や写真等の郷土資料の他、『緒明山通信』(旧市史資料室通信)のバックナンバーもご覧いただけます。